

あとがき

「まえがき」にあるように、研究所は「子どもの権利条約」を実効的なものにするための一助にもと思い、創立十周年を期して、子どもがおかれている状況を新潟県に即して網羅的に明らかにする『新潟県の子ども白書』の刊行を決意しました。

しかし、その企画過程で、新潟県の「不登校」や「いじめ」が他県に比して特別に多く、子育てにとくに困難があるのではないかという思いが強まり、日常すぐに役立つ情報や手引きも提供して、いくらかでも子育て支援ができればと考えるにいたりました。あえて書名を「子育て百科」とした所以です。そのために、普通の「白書」にはないユニークさがでたのではないでしょうか。出来不出来はともかく、全国は知りませんが、少なくとも新潟県では初めての試みになったと思います。

新潟県は地形的には背後を高い山々に囲まれ、独立的な一国のように見えますが、実際は上越新幹線が象徴するように、伝統的な県政のあり方によって、政治、経済、教育、文化すべてにおいて、時どきの政府の政策を無批判にしかも集中的に取りいれました。経済とくに土木開発が優先され、教育・文化や福祉が軽視されました。こうして新潟県は教育・文化の後進県になりました。最近でも「環日本海」政策で、新潟市をゲートシティといったり、新幹線を新潟空

港まで延ばしたいというのも、東京の大きな力を意識してのことでしょう。

新潟県は広く、自然も資源も豊かです。わたくしたちは新潟県が前記のような状態にいることをたいへん残念に思います。とくに教育や文化において県民の生活や要求に根ざした独自の考えや計画をもたなければ、いつまでたっても子どもの権利も保障されません。

そのために、本書では新潟県を一国のようにとらえ、地域ごとに異なる子育て経験を交流しあい、子どもの意見をききながら、新潟県が子ども問題を最優先するといった独自の子育て理念のうえにたつた子育て条件を考えることができるように、ガイドや情報、子どもの意見をのせました。また不十分ながら第四章以下は研究所十年の研究成果の一端です。大方のご批判をいただければ幸いです。

この小さな書物は実に多くの人々に支えられてできました。当初研究所の手に余ると考えられていたものをいま上梓できたのは、ひとえに会員諸兄姉と友誼団体、その他多くの人々の支援のたまものです。紙幅の都合で芳名は列記できませんが、厚くお礼申しあげます。また、多数のすぐれた論考を割愛せざるを得なかったことを深くお詫びいたします。

一九九六年九月

にいがた県民教育研究所所長

「白書」編集委員長

八 木 三 男